

平成 2 2 年度病虫害発生予報第 2 号

平成 2 2 年 4 月 2 2 日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

区 分	農作物名	病 害 虫 名	発 生 時 期	予想発生量
普通作物	イ ネ	苗立枯病	-	やや多い
		ばか苗病	-	やや少ない
		イネミズゾウムシ	やや遅い	やや少ない
果 樹	ナ シ	黒斑病	やや早い	平年並
		黒星病	やや早い	やや多い
		赤星病	やや早い	平年並
		カメムシ類	平年並	やや多い
	カ キ	灰色かび病	やや早い	平年並
ブドウ	灰色かび病	平年並	やや多い	
	べと病	平年並	平年並	
野 菜	ネ ギ	べと病	早 い	多 い
		さび病	平年並	平年並
		衦 ^ハ ガ ^リ ハ ^エ 、衦 ^ア サ ^ミ マ	やや遅い	平年並
	スイカ	菌核病	平年並	やや多い
		つる枯病	平年並	平年並
		ス ^カ 、メ ^ロ ン、外 ^コ	平年並	平年並
スイカ、メロン	ハダニ類	やや遅い	平年並	

気象予報（抜粋）

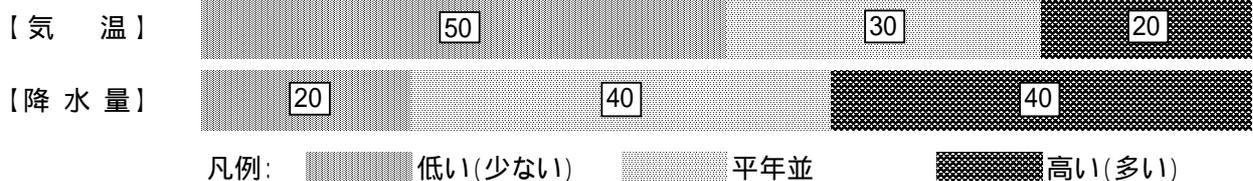
1 か月予報（4月17日～5月16日：4月16日、広島地方气象台発表）

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

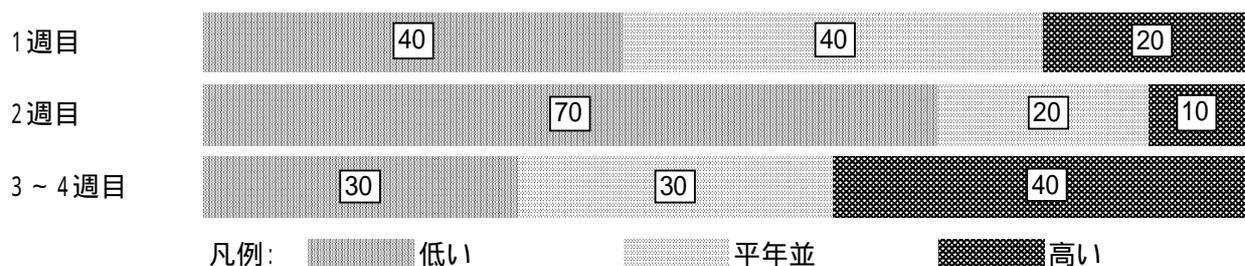
天気は数日の周期で変わるでしょう。平年に比べ曇りや雨の日が多い見込みです。

向こう1か月の気温は、低い確率50%です。降水量は平年並または多い確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は平年並または低い確率ともに40%、2週目は低い確率70%です。

< 向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率 (%) >



< 気温経過の各階級の確率(%) >



普通作物

[イ ネ]

1 苗立枯病

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病後の防除は困難であるため、予防防除を徹底する。

イ 育苗環境を清潔に保ち、育苗中の温度管理及び水管理に注意する。

ウ リゾプス属菌による苗立枯病が発生した場合には、発病部分の回復は見込めないが、緑化期(但し、は種14日後まで)までであれば、直ちにダコニール1000の500～1,000倍液などをかん注することにより、蔓延を防止できる。

エ ムレ苗が発生した場合には、タチガレース液剤の500～1,000倍液又はタチガレン液剤の500～1,000倍液を、箱当たり0.5リットルかん注し、夜間の保温と昼間の遮光に努め、苗の回復を図る。移植可能であれば、早めに本田に移植する。

2 ばか苗病

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

昨年の本病の発生はやや少なかったため、本年用種子の保菌率は低いものと推測される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 温湯種子消毒では、浸漬時間、温度などを厳守する。消毒後の種子を保管する場合には、種子を十分に乾燥させ、清潔な冷暗所に保管する。浸種時には、必ず水道水を使用し、適宜、水の交換を行う。

イ 薬剤による種子消毒（低濃度長時間浸漬）にあたっては、以下のことに十分注意して行う。浸漬処理時の薬液量の不足、あるいは低温時の処理で効果が低下するので、十分な薬液量を確保し、液温は10以上を確保する。消毒後の浸種は停滞水中で行い、水の交換は原則として行わないが、水温が高い場合など酸素不足になる恐れがあるときは静かに換水する。

3 イネミズゾウムシ

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	やや遅い
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 4月20日現在、予察灯（鳥取市橋本）への飛来は確認されていない。

イ 4月20日現在、本種の飛翔に必要な有効温量の積算値は平年並～やや低い。また、向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや遅くなるものと見込まれる。

ウ 前年の第1世代成虫の予察灯への誘殺数は平年に比べて少なかった。

(3) 防除上注意すべき事項

育苗箱施用剤の防除効果が高いので、使用時期及び使用量を守り、1箱ずつ丁寧に薬剤を施用する。特に1箱当たりの施用量が不足すると、著しく防除効果が低下するので注意する。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期	やや早い
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（北栄町由良宿）における4月中旬の孢子飛散数は、平年を下回った。

イ ナシ園における越冬菌密度調査の結果によると、短果枝の病芽率はほぼ平年並であったが、一年枝上の枝病斑数および病枝率は平年をやや下回った。

ウ ナシの生育は平年に比べてやや早い。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 小袋掛け終了までの薬剤散布の間隔は5～7日程度とし、特に小袋掛け直前の防除を徹底する。

イ 薬剤はベルコートフロアブル1,500倍液、ユニックス顆粒水和剤47の1,500倍液、有機銅フロアブル（キノドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1,000倍とポリオキシシンAL水和剤1,500倍の混用液などを使用する。

ウ スピードスプレーヤにより防除を実施する地域では、往復走行又は縦横走行による散布を行い、散布むらがないように注意する。

エ 雌しべ感染を防ぐため、摘果するときにはできる限り雌しべを取り除く。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（北栄町由良宿）における病落葉からの子のう胞子飛散数及び果そう基部病斑からの分生子飛散数はほぼ平年並に推移している。

イ ナシの生育はやや早い。

ウ 向こう 1 か月の気象予報では、平年に比べ曇りや雨の日が多いと見込まれており、発生をやや助長する条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる果そう基部病斑は見つけ次第切除し、ほ場外で処分する。

イ 薬剤は、落花期に E B I 剤（スコア顆粒水和剤又はオンリーワンフロアブル）4,000 倍とチウラムフロアブル（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）500 倍の混用液など、摘果期にベルコートフロアブル 1,500 倍液、ユニックス顆粒水和剤 47 の 2,000 倍液などを散布する。

3 赤星病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並（一部やや多い）

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（北栄町由良宿）のビヤクシン上における冬胞子堆形成量はほぼ平年並であったが、県東部ナシ園の近くに植栽されたビヤクシン類に冬胞子堆形成量が多い地域が認められる。

イ 県予察ほ場におけるビヤクシン上の冬胞子堆成熟度は 4 月 12 日に 100% となっており、小生子の形成開始時期は平年に比べてやや早い。

ウ ナシの生育は平年に比べてやや早い。

エ これまでの気象経過及び向こう 1 か月の気象条件から、発生時期はやや早く発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤は、落花期に E B I 剤（スコア顆粒水和剤など）4,000 倍とチウラムフロアブル（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）500 倍の混用液などを散布する。

イ 例年発病の多い園又は初期病斑が多く認められた園では、5 月上～中旬に E B I 剤（スコア顆粒水和剤 4,000 倍液又はオンリーワンフロアブル 2,000 倍液など）を追加散布する。

4 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 4 月上旬現在、予察灯及び集合フェロモントラップにおけるカメムシ類の誘殺数は平年並である。

イ クサギカメムシの越冬量が多い地点が一部で認められた。

ウ 向こう1か月の気象予報から、春季におけるナシ園への成虫の飛来時期は、平年並の4月下旬～5月上旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 特に山間地、民家近くのナシ園で、例年発生が認められる園では、幼果期の防除が必要である。

イ 摘果期～小袋掛け期の幼果を加害するので、この時期に果樹園への飛来が認められた場合、直ちにジノテフラン水溶剤(アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤)2,000倍液などを散布する。

[カキ]

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、本病の発生は確認されていない。

イ カキの生育は平年に比べてやや早い。

ウ 向こう1か月の気象条件から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 病原菌は低温、多湿条件を好むため、天候不順が続くと、本病が発生しやすい。また、強風などによって若葉が傷ついた場合に突発的に発生しやすい。

イ 西条、伊豆などの品種では、本病の発生が多い傾向にある。

ウ 防除薬剤は、フルピカフロアブル3,000倍液、ゲッター水和剤

1,500倍液又はオンリーワンフロアブル2,000倍液などを散布する。

[ブドウ]

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、本病は平年並の発生量である。

イ ブドウの生育はほぼ平年並である。

ウ 向こう1か月の気象条件から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 病原菌は低温、多湿条件を好むため、開花期が天候不順になると、本病が発生しやすい。

イ 開花前～落花後にパスワード顆粒水和剤1,500倍液、スイッチ顆粒水和剤3,000倍、ゲッター水和剤1,500倍液、ポリベリン水和剤

1,000倍液、ロブラール水和剤1,500倍液及びロブラールくん煙剤

100g/くん煙室容積300～400m³(高さ2m、床面積150～200m²)のいずれかを使用する。

ウ 施設栽培では多湿条件が続くと発病が多くなるので、早朝の換気を行って施設内の湿度を下げる。

2 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、本病の発生はほとんど認められていない。

イ ブドウの生育はほぼ平年並である。

ウ 向こう1か月の気象条件から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 開花期以降、天候不順になると、本病が発生しやすい。

イ 薬剤は、展葉6～7枚にアリエッティC水和剤800倍液、落花後(小豆大)にアミスター10フロアブル1,000倍液又はストロビードライフロアブル2,000倍液を使用する。

ウ 発病果及び病葉は見つけ次第、園外に持ち出して処分する。

野菜

[ネギ]

1 ベと病

(1) 予報の内容(平成22年4月14日付、病害虫発生予察注意報を発表)

発生時期 早い

発生量 多い

(2) 予報の根拠

ア 本年の現地白ネギほ場における本病の発生時期は、平年と比べて早い4月上旬であった。

イ 4月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年と比べて多い。

ウ 本病は、15 前後の気温で降雨が続くと発病が増加するが、向こう1か月の気象予報によると、発生量は引き続き多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

病害虫発生予察注意報第1号を参照

2 さび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除は、孢子飛散が始まる4月下旬頃からオンリーワンフロアブル1,000倍液、パイレトン乳剤1,000倍液、ラリー乳剤4,000倍液などを散布する。

イ 既に発病がみられている場合は、パイレトン乳剤又はラリー乳剤にカリグリーの800倍液を混用散布する。

ウ 多発ほ場では、アミスター20フロアブル2,000倍液を散布する。

3 ネギハモグリバエ、ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月下旬現在、現地調査ほ場において、ネギハモグリバエ、ネギアザミウマともにほとんど発生は見られていない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、両種とも発生時期はやや遅く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 苗の定植時には、オンコル粒剤5の6kg/10a、ジノテフラン粒剤(アルバリン粒剤又はスタークル粒剤)6kg/10aの株元散布又はアクタラ粒剤5の9kg/10aの作条混和などの処理をする。また、定植前日~定植時のジノテフラン顆粒水溶剤(アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤)50倍液の育苗トレイ灌注なども効果的である。

イ 本ほ生育中のネギに対しては、オンコルマイクロカプセル1,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液などを散布する。

[スイカ]

1 菌核病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 4月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生はほとんど見られていない。

イ 本病は、15~20位の気温で多湿条件が続くと発病が増加するが、向こう1か月の気象予報によると、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。咲き終わった花弁は早く摘み取って除去する。

イ 薬剤は、ベルコート水和剤1,000倍液、カンタスドライフロアブル1,000倍液、ロブラール水和剤1,000倍液などを散布する。

ウ 曇雨天が続く場合は、ハウスではスミレックスくん煙顆粒6g/100m³(床面積50m²×高さ2m)、ロブラールくん煙剤100g/300~400m³(高さ2m、床面積150~200m²)などを使用する。

2 つる枯病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生はほとんどみられていない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。

イ 本病は株元を中心に発病が始まるので、株元にも薬液が十分かかるように散布を

行う。薬剤は、ジマンダイセン水和剤600倍液、ジマンレックス水和剤

500倍液、アントラコール顆粒水和剤600倍液、ダコニール1000の

1,000倍液などを散布する。

[スイカ、メロン、タバコ]

1 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場(東伯郡北栄町)における黄色水盤への有翅アブラムシ類の初飛来は平年並の4月12日であり、その後の誘殺数は平年並である。

イ 4月下旬現在、一部のハウス栽培スイカほ場において、アブラムシ類の発生が確認されている。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスの換気部分や出入口には寒冷紗被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。

イ 初発生に注意し、初期防除を徹底する。

ウ スイカのハウス栽培では、交配前にはチェス顆粒水和剤5,000倍液などのミツバチへの影響のない薬剤を散布する。

エ スイカのトンネル栽培では、つる引き誘引時期にチェス顆粒水和剤5,000倍液、交配前にバリアード顆粒水和剤4,000倍液などを散布する。

オ メロンでは、チェス顆粒水和剤5,000倍液、バリアード顆粒水和剤4,000倍液などを散布する。

カ タバコ黄斑えそ病の防除対策として、タバコとジャガイモに対し、同時期にアブラムシ類の防除を行う。薬剤は、タバコではアドマイヤー水和剤

2,000倍液、オルトラン水和剤1,500倍液などを使用する。ジャガイ

モではベストガード水溶剤2,000倍液、アドマイヤー水和剤2,000倍液などを使用する。

[スイカ、メロン]

1 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月上旬から中旬にかけての気温は平年よりやや低く推移したため、ハダニ類の畦畔部からの移動時期は平年よりやや遅くなると予想される。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア スイカでは、畦畔雑草に対して、4月下旬までにハダニ類に対して効果のあるハービー液剤200倍液などの除草剤を散布する。
- イ ハウスなどで既に発生がみられる場合、スイカ、メロンともにバロックフロアブル2,000倍液、ダニサラバフロアブル1,000倍液などを散布する。多発した場合はコロマイト乳剤1,000倍液、マイトコーネフロアブル1,000倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫発生予察情報、フェロモントラップ調査結果(ナシのシンクイムシ類)などの参考情報、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-0723

E-mail : boujyot@titan.ocn.ne.jp

次回の予報発表は、5月13日(木)の予定です。